

20世紀前半における日本人作成の ハルビン案内書と市街地図

中 西 僚太郎

20世紀前半における日本人作成の ハルビン案内書と市街地図

中 西 僚太郎

1. はじめに

本研究は、旧満州に関する新たな地理的知識・情報の蓄積を意図した研究の一環として、20世紀前半のハルビンを対象として、日本人が作成した案内書と市街地図について調査し、その全体像を提示することを目的としたものである。

一般的に、過去の特定の場所や地域に関する地理的知識・情報は、地誌や地図などから得ることができる。地誌には兵用地誌から学術書まで、さまざまな種類があるが、本研究で取り上げる案内書はその一種と位置付けることができる。案内書は多様な性格をもった刊行物であり、商工案内や旅行・観光案内を意図して作成されたものが多い。また、市勢要覧のような行政組織等の広報を意図して作成されたものも案内書の一種として見なしてよいであろう。このような案内書は、都市や観光地の地理的知識を記したものとして非常に有用な資料である。しかしながら、従来、旧満州に関して、旅行・観光案内については、その集成や検討は進められているものの¹⁾、案内書全体に関しては十分な検討が行われていない。本研究で取り上げるハルビンに関しては、案内書としてどのようなものがあるのかは明らかにされておらず、その全体像の提示が望まれる状況にある²⁾。

地図については、地形図がもっとも基本的な資料となるが、近年は日本の陸軍が作成した外邦図の研究が進み³⁾、旧満州に関しても過去の地理的情報の蓄積は進んできている。しかし、地方の行政機関や民間組織・会社が作成した都市図や観光地図については、筆者が大連の市街地図に関して検討を行ったほかは⁴⁾、まだ研究が進んでいないと思われる。都市図や観光地図には、地形図にはない詳細な都市や観光地の情報が記され、都市図の場合には、商工者の一覧が地図の周囲や裏面に付されるなど、商工案内と同じ役割を持ったものも少なくない⁵⁾。そのため、どのような都市図（市街地図）があったかを明らかにすることは、都市の地理空間情報としてだけではなく、案内書の場合と同様に重要な意義を有する。

従来、ハルビンの市街地図に関しては、ハルビンの都市形成史研究において、部分的に紹介され、利用されてはいる⁶⁾。しかし、部分的な紹介と利用に止まっており、全体像は不明なままで

ある。近代のハルビンの都市形成や商工業研究の基礎資料として、その全体像の解明が待たれる状況にある。

ところで、案内書や地図と並んで、旅行・観光に関わる資料としては絵葉書がある。最近では戦前期の絵葉書に関する関心は高く、旧満州に関しても絵葉書を活用した研究は少なくない⁷⁾。ハルビンに関しても、デジタルアーカイブを基に、絵葉書を用いて当時のハルビン観光を分析した研究もある⁸⁾。絵葉書や写真も、当時の地理的知識・情報を文字資料とは別の形で伝えてくれる貴重な資料であるが、発行年が不明のものが大量に見いだせる状態にある。そのため、その研究だけで別稿を要するものであるため、本研究では絵葉書・写真は検討の対象外とする。

なお、ハルビンの案内書、市街地図の総合的な検討においては、日本人のみならず、外国人、とくにロシア人が作成した資料の検討も必要であることはいうまでもない。しかし、それは現在の筆者の能力を越える作業となるため、本研究では日本人が作成した、あるいは関わって作成されたものに限定することにしたい。日露戦争後のハルビンにおいて、日本人の経済活動は活発になっていき、昭和期にかけては日本人旅行者も増加していった⁹⁾。そのため、日本人作成の案内書、市街地図は数多く見出すことができ、その検討だけでも十分な意義があると考えられる。

次章では、まず20世紀前半のハルビンの歴史を概観した後、3章で案内書、4章で市街地図について検討を行う。市街地図に先立って案内書の検討を行うのは、案内書にはしばしば市街地図が付されることがあるためである。

2. 近代のハルビン略史

ハルビンの歴史を概観するために、19世紀末以降、第二次世界大戦の終了（1945年）までの半世紀に関して、主要事項を年表にまとめたのが表1の事項欄である。ハルビンの歴史は、1896年に帝政ロシアが清朝より満州での鉄道（東清鉄道）敷設権を入手した後、満州北部の鉄道の拠点として、1898年に黒龍江との交差点に都市建設を開始したことに始まる。同年にロシアは都市計画を策定、翌年にはハルビンでのロシア正教の拠点となる中央寺院が着工されている。1903年にはハルビン、旅順間の鉄道が完成し、ロシアは満州の東西を結ぶ鉄道路線に続いて、満州の南北を結ぶ鉄道路線を手にした。しかし、翌年には日露戦争が始まり、敗戦によってロシアは、長春より南の旅順に至る鉄道路線の経営を日本に譲り渡すことになった。日本はその経営のために、1906年に南満州鉄道株式会社（満鉄）を設立したが、満鉄の支配下となったのは長春以南の南満州であり、ハルビンはロシアによる東清（東支）鉄道の支配下に止まった。その後、1917年にはロシア革命が起り、ロシアの支配力は弱まり、中国勢力による鉄道附属地の利権回復が行われ、中国の支配力が強まった。

ハルビンの日本人は日露戦争後から増加し始め、1907年には日本領事館が開設、翌年には日本

表1 近代ハルビンの略年表

西暦	元号	年	事柄 ()は月	日本人数	案内書	市街地図
1895	明治	28	日清和親条約(4)	—		
1896	明治	29	東清鉄道敷設権ロシア獲得(6), 東清鉄道会社設立(12)	—		
1897	明治	30		—		
1898	明治	31	東清鉄道南部線の敷設権ロシア獲得(3), ハルビン建設開始, 都市計画を立案	8		
1899	明治	32	中央寺院着工	—		
1900	明治	33	松花江鉄橋竣工(9), 義和団事変始まり(6)	—		
1901	明治	34		—		
1902	明治	35		10		
1903	明治	36	ハルビン・旅順間の鉄道完成	519		
1904	明治	37	日露戦争開始, 日本人引き上げ(2)	1000		
1905	明治	38	日本海海戦(5), 日露講和条約(9)	—		
1906	明治	39	満鉄設立(11)	320		
1907	明治	40	日本領事館開設(3)	627		
1908	明治	41	日本人居留民会設立(4)	590		
1909	明治	42	伊藤博文暗殺(10)	723		
1910	明治	43		780	■	
1911	明治	44		936		
1912	明治	45	中華民国成立(1), 清朝皇帝退位(2)	1086		
1913	大正	2		1218		●
1914	大正	3	第一次大戦開始(7)	1456		
1915	大正	4		1516		
1916	大正	5		2006		
1917	大正	6	ロシア革命(3,11)	2288	■	
1918	大正	7	日本シベリア出兵(8), 哈爾濱商品陳列館開設	2768		
1919	大正	8		4114		●●
1920	大正	9		3320		
1921	大正	10	哈爾濱商工会議所設置, 中国勢力が東支鉄道の附属地行政権を回収	3768	■	
1922	大正	11	日本シベリアから撤兵(10)	3570	■	●
1923	大正	12		3460	■	●
1924	大正	13		3342		
1925	大正	14		3289		
1926	大正	15	中国勢力がハルビンの支配を確立	3366	■▲	●●
1927	昭和	2		3715		
1928	昭和	3	張作霖爆殺(6)	3725	■	
1929	昭和	4		3833		●●
1930	昭和	5		3910		
1931	昭和	6	柳条湖事件(9)	3823	▲	
1932	昭和	7	満州国建国(3)	5051		
1933	昭和	8	ハルビン特別市成立(7)	9096	■▲	●
1934	昭和	9		15655	■	●
1935	昭和	10	ソ連が東支鉄道を満州国に売却(1)	27623	■▲	●
1936	昭和	11		—	■	●●
1937	昭和	12	哈爾濱観光協会設立(3), 盧溝橋事件(7)	—	■	●
1938	昭和	13		—		●
1939	昭和	14		—	■▲▲	●●●●
1940	昭和	15		—	■	
1941	昭和	16	真珠湾攻撃・日米開戦(12)	—		●
1942	昭和	17		—	▲	
1943	昭和	18		—		●
1944	昭和	19		—		
1945	昭和	20	ポツダム宣言受諾, 満州国滅亡(8)	—		

(注)案内書, 市街地図ともに, 初版もしくは修正版・増補版が発行された年次に記号を記した。案内書の■は冊子体, ▲はリーフレット指す。ハルビンに関する事柄は, 越沢明『哈爾濱の都市計画』, 表2の案内書などによる。日本人数の—は不詳, 1907年までの人数は『北満事情』, それ以後は『哈爾濱事情』による。

人居留民会が設立された。その後、1918年には哈爾濱商品陳列館が開設、1921年には哈爾濱商工会議所が設置されている。このような状況後に、1931年には満州事変が勃発し、1932年には満州国が建国された。満州国建国後のハルビンは特別市となり、日本人は急速に増加していった。満州国期のハルビンは、実質的には日本の支配下にあり、日本人による新たな都市計画が立てられたが、1945年の日本の敗戦により、日本人によるハルビンの支配は終焉した。

3. ハルビンの案内書

(1) 案内書の概要と発行の年次的傾向

先にも述べたように、案内書は多様な性格を持っているが、商工案内もしくは観光案内、あるいは行政等の広報としての意味を持っている。刊行物のタイトルは、「案内」と付くものが多いが、そうでないものもある。形状は冊子を中心であるが、1930年代以降の観光案内にはリーフレットが多くなる¹⁰⁾。本研究では、20世紀前半に日本人が作成した、リーフレットの形状を含めたハルビンの案内書について、国会図書館や国際日本文化研究センター図書館、岐阜県図書館などの各種図書館、古書店が所蔵するものを可能な限り調査し、入手可能なものは入手した。その結果得た情報をもとに、案内書の書誌事項を一覧表にまとめたのが表2である。なお、ここではハルビンに関する内容が含まれるものでも、満州あるいは満州北部全体を対象としたものは対象外とした。また、情報を得た案内書には、増刷版や改訂版であるケースや、奥付から初版からの増刷や改訂の変化が判明するものがある。その場合は、表2では初版と改訂版・増補版のみを取り上げたが、初版や改訂・増補後の初版の所在が確認できないものは、それに次いで版が早いものを取り上げた。所蔵先は複数ある場合でも一か所のみ示し、各種図書館に所蔵がなく、筆者が所蔵のものは「個人」と表記した。

案内書発行の年次的傾向を知るために、表1の案内書の欄には、各案内書の初版もしくは改訂版・増補版が発行された年次に印をつけて示した。それによって、案内書発行の年次的傾向を見ると、1910年から発行が始まるが、それは例外的に早い時期のもので、継続的に発行が行われるようになるのは1920年代以降である。そして、1930年代には発行が盛んとなるが、1940年代には非常に少なくなる。1930年代で発行が盛んなのは、満州国建国後の1933年から1939年の時期であり、この頃は日本が実質的にハルビンを支配し、社会的には比較的安定していたためと考えられる。この時期の案内書は観光案内的な性格が強く、形状もリーフレットのものが比較的多い。1940年代に少なくなるのは、日中戦争が激化し、太平洋戦争へと突き進んでいく時期であるためである。満州国期に案内書が多く発行されているのは当然としても、1920年代に発行が継続的に行われているのは、ロシア革命後、シベリア出兵などがあり、日本人が次第に増えて、1918年に哈爾濱商品陳列館、1921年に哈爾濱商工会議所が開設されたことが大きく影響している。後述の

表2 ハルビンの案内書一覧

No.	名称	付図・挿図の地図名称	著者	発行所	出版年月	形状	頁数、縦×横 (cm)	備考	所蔵
1	哈爾濱使館	付図：東清鐵道線路図	松浦和介 (発行兼編集人)	北兵社	1910/11	冊	167	定価70銭	東京外大
2	哈爾濱案内	付図：哈爾濱市街全図	—	哈爾濱 油屋ガナル	1917/8	冊	39	付表に銀行会社商 店一覧	個人
3	哈爾濱事情	—	中村義人	上屋書店、永島高 (発行兼印刷人)	1921/3	冊	326	定価2円	山口大
4	哈爾濱案内	—	哈爾濱商品陳列館編	哈爾濱商品陳列館	1922/6	冊	92	初版	国会図
5	哈爾濱の概念	—	中村義人 (編集人)	哈爾濱日本商業会議所	1923/6	冊	44	初版	山口大
6	哈爾濱案内	付図：哈爾濱市街全図	哈爾濱商品陳列館編	哈爾濱商品陳列館	1925/1	冊	213	増補6版、付録日 露支会誌短編	筑波大
7	哈爾濱の概念	—	中村義人 (編集人)	哈爾濱日本商業会議所	1925/9	冊	41+30	増補4版	国会
8	ハルビン案内 X A P B И H	挿図：哈爾濱市街図	—	南滿洲鐵道株式会社	1926/7	リーフ	17×9.5	英文版あり	個人
9	宝石の都 哈爾濱案内	付図：哈爾濱市街全図、哈爾濱地頭区略図	—	岩間商會堂石部	(1928)	冊	16	—	個人
10	哈爾濱の概念	—	中村義人 (編集人)	哈爾濱日本商業会議所	1930/6	冊	49	増補改訂8版	滋賀県立大
11	哈爾濱案内	表紙挿図；(哈爾濱略図)	—	南滿洲鐵道株式会社	1931/5	リーフ	19×9	1932年版あり	国会図
12	大哈爾濱	付図：哈爾濱特別市区域別図	哈爾濱特別市公署総務処 (編集兼発行人)	哈爾濱特別市公署	1933/12	冊	236	—	国会図
13	最新ハルビン案内	付図：哈爾濱市街地図	藤岡光治 (編集兼発行人)	大北新報社	1934/5	冊	246	定価1円	広島大
14	哈爾濱	挿図：哈爾濱市街図	—	南滿洲鐵道株式会社	1933/7	リーフ	19×9	1934年版あり	東洋文庫
15	ハルビン、北滿の鉄道沿線 リー沿岸案内	付図：哈爾濱市街地図	藤岡光治 (編集兼発行人)	哈爾濱電信所	1935/4	冊	401頁	定価1円50銭	日文研
16	哈爾濱 X A P B И H	裏面：哈爾濱市街圖	—	鐵路稅局	1935/10	リーフ	19×9	1937年版あり	日文研
17	X A P B И H 1936 ハルビン	付図：滿洲國鉄道地図	長谷川治編	哈爾濱印刷所出版部、原好一 (発行人)	1936/5	冊	365頁	定価80銭	大阪市大
18	哈爾濱	付図：市内交通地図	哈爾濱特別市公署総務処庶務科編	哈爾濱特別市公署	1936/6	冊	170頁	—	日文研
19	哈爾濱	付図：哈爾濱市街図、裏表紙：哈爾濱遊覧案内図	九里正蔵 (発行人)、松宮吉郎 (著作人)	滿鐵通運總局營業局旅客課	1937/6	冊	16頁	—	個人
20	ハルビン遊覧案内	挿図：哈爾濱市街図	—	哈爾濱特別市公署交通局	(1935-1938)	リーフ	19×9	—	個人
21	哈爾濱遊覧	挿図：哈爾濱市内遊覧バスコース	—	哈爾濱交通株式会社	(1935-1938)	リーフ	19×9	—	個人
22	哈爾濱ノ觀光 附サービス説本	挿図：(ハルビン觀光バスルート)	南部春雄 (著作兼発行人)	哈爾濱觀光協会	1939/5	冊	49	—	国会図
23	ハルビン觀光案内	付図：(觀光バスコースの展開図)	坂井昇 (哈爾濱交通株式会社) (編集人)	哈爾濱交通株式会社企画課業務課	1939/6	リーフ	18×9	—	個人
24	哈爾濱ノ觀光	挿図：(ハルビン觀光バスルート)	南部春雄 (著作兼発行人)	哈爾濱觀光協会	1939/9	冊	33	—	個人
25	哈爾濱 X A P B И H	挿図：(哈爾濱市街略図)	哈爾濱鉄道局營業課	哈爾濱鉄道局營業課	1939/9	リーフ	17×12.5	—	個人
26	北滿事情 附哈爾濱觀光案内 (第一 部) 北滿事情、第二部 哈爾濱觀光案 内)	—	藤岡光治 (編集兼発行人)	哈爾濱電信所	1940/4	冊	254+138	定価1円50銭	日文研
27	北滿の雄都 哈爾濱	—	哈爾濱市長官房文書課	哈爾濱市長官房文書課	1940/7	冊	20	—	個人
28	哈爾濱	挿図：哈爾濱市街略図	哈爾濱鉄道局營業課	哈爾濱鉄道局營業課	1942/4	冊	12	—	アジア経済
29	はるびる觀光 X A P B И H	付図：(バスノ觀光コース)	—	哈爾濱交通株式会社	(1939以降)	リーフ	17×9	—	個人

(注) 付図・挿図の()は筆者が付けた名称。発行年月の()は筆者の推定、?月は記載がなく不明。形状のリーフは、リーフレットのこと。縦横の大きさは墨んだ状態。一は付図がないこと、記載がないことを示す。所蔵の個人は筆者所蔵、大学名などはその付属図書館を示す。

ように、両者は1920年代に案内書の発行を繰り返していた。

(2) 案内書の事例

次いで、表2に示した発行年の順に各案内書について説明してみよう。なお、当時のハルビンの漢字表記は、資料名を通時的に見ると時期によって異なっており、1928年頃までは「哈爾賓」、その後は「哈爾濱」となっている。理由は明らかではないが、市街地図においても同じ頃に表記が変化している。表中および、以下の記述で資料名を提示する際は、原典に従って「哈爾賓」と「哈爾濱」を使い分けることにする。

No.1の『哈爾賓便覧』は、奥付によると発行は1910年11月、発行所は北辰社で、発行兼編集人は杉浦和介となっている(表紙には北辰社同人編とある)。杉浦と北辰社の住所は同じ「哈爾賓埠頭区モストワヤ街」であることから、杉浦は同社の代表と考えられる。北辰社がどのような会社か詳らかではないが、同書奥付の後に北辰社の宣伝として、「露国及北満州研究の急先鋒」「調査、出版、貿易中介の業務をなす」との文言と社員と思われる4名の写真が掲載されており、日露戦争後の満州ブームに乗って、一旗揚げようとハルビンにやってきた人たちが設立した調査会社とみることができよう。同書の緒言には、「本書は真に便覧に過ぎず、只旅行客及新来者の案内と在住者の便宜の為に編纂せり」と作成目的が書かれている。当時のハルビンでは、旅行客とは観光客ではなく、商用客とみなすことができることから、新来者や在住者を含めた商工業者の仕事ならびに生活の便宜のために編集されたものといえる。また、当時ハルビンの総領事であった川上俊彦、衆議院議員であった鈴木天眼らが序文を寄せている。1910年当時は、商品陳列館や商業会議所がまだ開設されていなかったため、北辰社のような同人社が、総領事らのお墨付きを得て、商工案内を発行していたといえよう。同書の内容を目次に従って列挙すると、下記の通りである。1. 哈爾賓の沿革、2. 位置及地勢、気候、人口、面積、3. 市の現状大要、4. 貿易、5. 交通鉄道、水路、郵便電信、電話、馬車、6. 行政、7. 各国領事館、8. 官衙及官吏、9. 東清鉄道庁、10. 学校、11. 公私団体諸会合、12. 新聞雑誌、13. 銀行、商業会議所、14. 商工業 本邦商、工業者、15. 弁護士、公証人役場、病院、医師、16. 旅館、17. 公園、18. 寺院、19. 劇場及娛樂場、20. 電灯、瓦斯、21. 記念の地、22. 墓地、23. 雑俎、通貨、市場、飲料水、道路、下水、風呂屋

ハルビンについて、沿革(歴史)と自然環境をふまえて、都市の社会経済について網羅的に解説しており、地誌的な内容となっていることがわかる。そして、これらの最後に日露清諸比較表として、度量衡や日暦の対象表が提示され、付録として清朝のハルビンの統治組織である双城府や、ハルビンの地名の解説などが付されている。また、同書には付図として「東清鉄道線路」が付けられている¹¹⁾。

No.2の『哈爾賓案内』は、表紙にタイトルが、裏表紙に「哈爾賓 油屋ホテル」と書かれた小冊子(全39頁)である。表紙と裏表紙を通して松花江を航行する汽船が、背景には松花江を渡る



図1 『哈爾濱案内』の表紙と裏表紙
1917年8月発行 冊子の大きさは15×9.5cm 筆者所蔵

東支鉄道の鉄橋がうっすらと描かれている（図1）。奥付には発行日（1917年8月20日）と非売品とだけ記されており、著者や発行所は記されていないが、油屋ホテルが宣伝のために発行したものとみることができよう。冒頭には4頁分の口絵写真（東清鉄道事務所やハルビン中央駅、日本総領事館の建物など）があり、その後、ハルビン市の沿革、市街の解説（新市街、埠頭区、傅家甸、旧ハルビン）、気候の紹介がある。そして、邦人発展の概況、在留邦人の職業別人口、総領事館とその職員、管轄区域、旅行券下附申請手続、欧州への輸出品、南満州から輸入品、日本居留民会、邦人教育事業、主な日本商店、ハルビン附近の邦人人口、銀行、新聞、工場の紹介があり、雑録として公園、市場、運動場、列車の時刻表と運賃、各地への里程、日支と日露の度量衡比較が記されている。端的には、先の『哈爾濱便覧』を簡略化し、商用の旅行者向けに編集された内容を持つといえる。本書で注目されるのは付録の市街地図と邦人経営の銀行、会社、商店の一覧である。付録の地図は、図2に示した通りで、「哈爾濱市街全図」と題して、ハルビンの市街全体が、縦42cm、横28cmのコンパクトな紙面のなかに収められている¹²⁾。後述のように、日本人発行の単体の市街地図で、最も古いのは1914年発行であり、続くのが1919年発行であることから、この付図はハルビンの市街地図としてはその間に位置付けられることになる。また、邦人経営の銀行等の一覧については、1919年の市街地図に同様な一覧が付いているが、それに先行する資料と位置付けられる。

No.3の『哈爾濱事情』は1921年発行で、著者は中村義人、発行所は上屋書店（在ハルビン）、発行兼印刷人は、永島義高、印刷所は哈爾濱新聞社となっている。永島と哈爾濱新聞社は住所が同じであることから、永島は新聞社の社主と考えられ、実際は哈爾濱新聞社が主たる発行主体であったとみることができよう。頁数は326あり、当時の案内書としては大部のものといえる。口絵

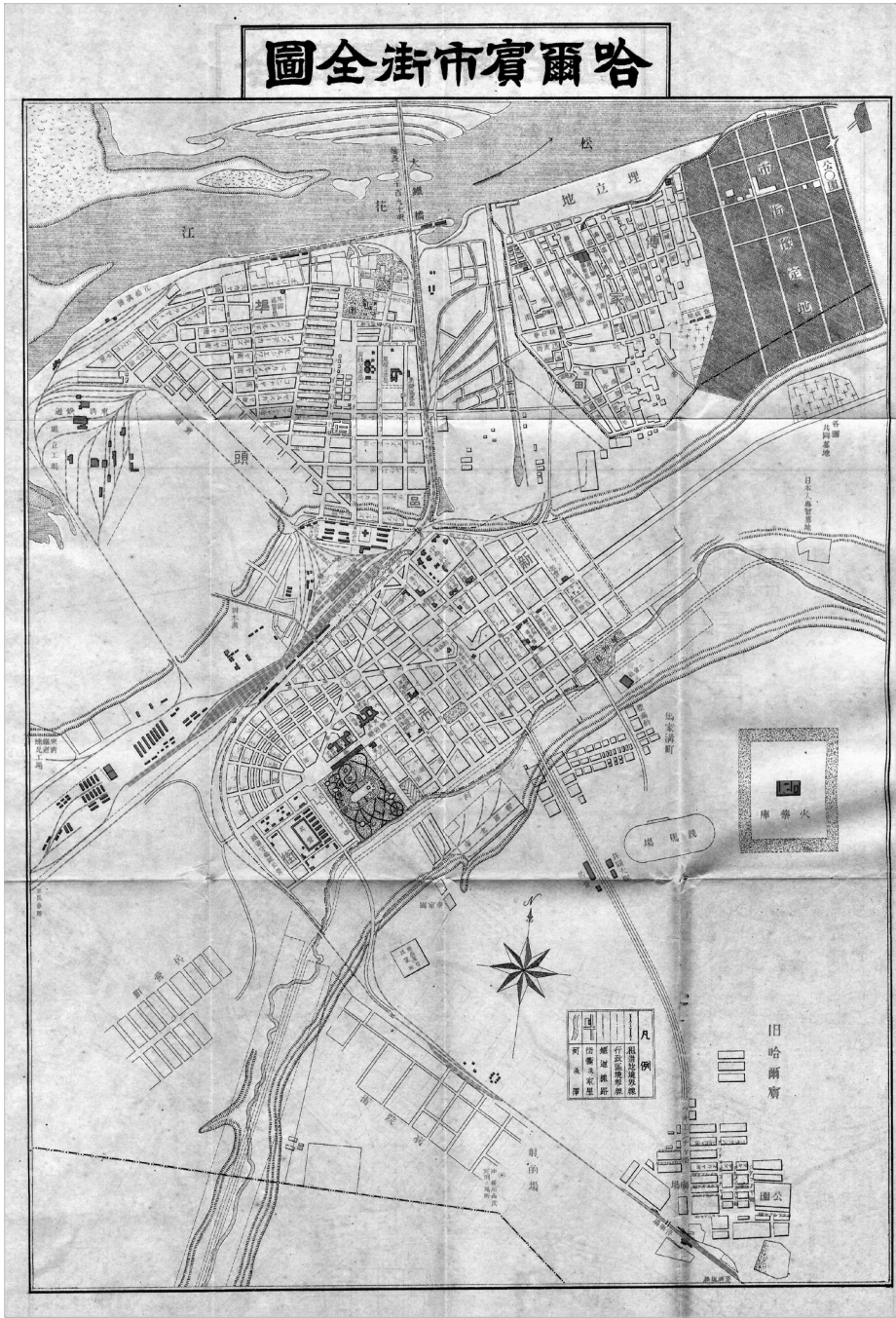


図2 「哈爾濱案内」の付図
 『哈爾濱案内』は1917年8月発行 多色刷 42×28cm 筆者所蔵

写真には、ハルビンの日本総領事や日本居留民会長、日本商業会議所会頭などとともに、北滿派遣隊司令官やハルビン駐屯の第53連隊長などの軍人の写真も掲げられており、シベリア出兵の影響がうかがえる。内容の目次を示すと以下の通りである。(イ) 沿革及発展史、(ロ) 位置並に地勢、(ハ) 哈爾賓の気象、(ニ) 人及人種、(ホ) 哈爾賓邦人、(ヘ) 哈爾賓の官衙、(ト) 行政並に警察、(チ) 哈爾賓の学校、(リ) 宗教並に寺院、(ヌ) 諸団体及組合、(ル) 新聞並に雑誌、(ヲ) 哈市衛生機関、(ワ) 交通及び運輸、(カ) 哈爾賓の商業、(ヨ) 哈爾賓の工業、(タ) 哈市通信機関、(レ) 劇場並に公園、(ソ) 旅館並料理店、(ツ) 雑俎

このように、本書もハルビンに関する地誌的内容となっているが、凡例には「本書は邦人発展を助長する意味に於いてしるせしもの」とあり、口絵写真には、出版援助者として日露実業哈爾賓支店の支店長の写真が掲げられているように、ハルビンの日本人商工業者の便を意図して編集されたものといえる。

No.4の『哈爾賓案内』は1922年に哈爾賓商品陳列館が編集発行した案内書である。同書は1928年発行の増補8版まで確認することができ¹³⁾、1920年代に繰り返し発行されていたものである。哈爾賓商品陳列館は日本政府の要請によって日露協会が設立した機関で、日本人の商工業活動を支援することを目的としていた。同書の本文は100頁に満たないが、商工業者の広告が多数挿入されており、全体としてかなりボリュームのある冊子となっている。口絵には、日本総領事館、商品陳列館、日本商工会議所及居留民会などの写真が17頁に渡って掲載されているが、以前の案内書と比べると、人物の写真は掲載されなくなっている。内容を目次によって示すと、1. 位置、2. 沿革、3. 気候、4. 人口、5. 商工業、6. 交通機関と電話・電信・郵便、7. 旅館、8. 土産品、9. 市中案内、10. 名所・官衙・銀行・会社・商店の名称・位置、11. 哈市に於ける列国人、12. 在哈邦人、13. 哈市を中心とせる経済的資料、となっており、最後に日露度量衡、日支度量衡が付録として付いている。この内容も地誌的性格をもった商工案内となっているが、土産品や市中案内、名所といった、それまでの案内書にはない章節の名称が見られ、観光案内的要素がうかがえるようになっている。また、目次の最後には、付図として「哈爾賓市街図」と記されているが、国会図書館所蔵の同書には付図は見いだせない。しかし、同書の1925年発行の増補6版(No.6)には「哈爾賓市街全図」と題された付図がある。これは後述の哈爾賓商品陳列館が発行した市街地図と酷似しており(付図の方が描写範囲は狭い)、発行所が同じことから、同じ元図から作成されたと考えられる。

No.5の『哈爾賓乃概念』は、1923年に哈爾賓日本商工会議所が初版を発行し、その後確認できる範囲では、1930年に増補改訂8版(No.10)が発行されている。これも1920年代に繰り返し発行されたものである。奥付によると、発行人は山田小一、編集人は中村義人となっている。山田小一は、哈爾賓商品陳列館に勤務したのち、哈爾賓日本商業会議所書記長になった人物であり¹⁴⁾、書記長として発行人となっていると思われる。中村義人は先の『哈爾賓事情』の著者であり、『哈

爾賓事情』には作成に当って援助してもらった人物として、商品陳列館の山田小一の名が記されている。このことから、『哈爾賓乃概念』は、『哈爾賓事情』と密接な関係にあることがうかがえる。『哈爾賓乃概念』は、その増補4版（No.7）の序文によると、「（前略）最近の旅行者は今迄の小冊子では満足せなくなり、モット詳細なものが欲しいと云う人が多くなった。是は旅行者が堅実化して結果であろう。此の新傾向は誠に喜ぶべきことで、此の新傾向に応ずる目的で編纂したのが此の冊子である」と記されている。同書の発行までに、同じ中村が著した『哈爾賓事情』や商品陳列館の『哈爾賓案内』といったボリュームのある案内書が既に発行されていることから、この序文の内容には肯首しがたいものがあるが、今までの小冊子とは、No.2の『哈爾賓案内』のようなものを指すのかもしれない。いずれにせよ、ここでの旅行者は、後のような観光客ではなく、商用の旅行者とみることができ、同書の内容も商工案内を基調とした地誌的内容となっている。内容の紹介は省略するが、同書の特徴は章節のタイトルが、1. 哈爾賓の名はどうして起こった？ 2. 哈爾賓は東北亜細亜の中心にある、3. 哈爾賓は想像するほど寒くなく、また暑くない、といった形で、従来は、沿革、位置、気象、として表現されていたものが、わかりやすい文章として示されていることにある。そして、本文は40頁足らずであるのに対して、増補4版では付録として、「哈爾賓は斯うして発展した町です」と題したハルビンの発展史が、30頁に渡って記されている。

No.8の『ハルビン案内』は1926年に満鉄が発行したリーフレットで、この形状の案内書としては最初のものと思われる。折り畳んだ表紙には、日本語で「ハルビン案内」とロシア語でХАРБИИНと書かれ、ロシア人ダンサーの絵が描かれている。筆者所蔵分には、「長春日本橋通、ジャパン、ツーリスト、ビューロー、長春案内所」との印が押してあり、長春で旅行者に配布されていたものと思われる。案内文は、主要視察箇所、通貨、気候、概観、沿革、農工業、貿易、観光箇所について、6頁で簡潔に書かれている。そして、裏面には「哈爾賓市街図」と題したハルビンの市街地図が掲載されている。この案内の内容は、商工案内としては簡潔すぎるものであり、リーフレットという形状からしても、以前の旅行者とは異なったタイプの旅行者、つまり観光を主目的とした旅行者向けの案内書ということが出来る。なお、同書には、同じ形状と構成で、判型は若干大きく、紙質がしっかりとした英文版もある（筆者所蔵）。

No.9の『宝石の都 哈爾賓案内』は、岩間商会宝石部が宣伝のために作成した小冊子（16頁）である。表紙にはタイトルと岩間商会の名称、郊外の志士の碑（横川省三、沖禎介の記念碑）の写真、裏表紙には松花鉄橋の写真が掲載されている。筆者所蔵分には、「此ノ廣告御持参ノ方ニ限り特ニ正価ノ二割引」との印が押してあり、岩間商会が宣伝チラシの代わりに旅行者へ配布したものといえる。口絵には岩間宝石店の写真や名古屋ホテルなどの写真があり、続いて宝石の紹介となるが、その後、哈爾賓案内として、位置、気候、人口、商業、汽車（東支鉄道）の運賃と時刻表、水運、旅館、土産品、市中の見物箇所などの簡単な記述がある。時刻表には昭和3年5

月（名古屋ホテル調）とあることから、本書の発行は同年（1928年）と推定される。付図として「哈爾濱市街全図」と「哈爾濱埠頭区略図」が付いているが、いずれも岩間商会の位置を示すためのもので、情報量は少ない粗雑な図である。

No.11の『哈爾濱案内』は、1931年に満鉄が発行したリーフレットである。表紙と裏表紙と続いた形でハルビン市街の略図が描かれ、ハルビンの市街地（新市街、埠頭区など）や、沿革、商工業、気候、通貨、祝祭と休日、遊楽、土産物、視察の順序、交通機関、旅館などの項目に沿って簡潔な解説が10頁分、記されている。これはNo.8の『ハルビン案内』の後継と思われる案内書であるが、市街地図は手書きの略図で、印刷も一色刷りであり、その後に満鉄が発行する同種のリーフレットと比べても簡素な感があるものである。

No.12の『大哈爾濱』は、序文に「本書は哈爾濱特別市勢の概要を記述し、其の案内書たらしめんとして編纂したものである」とあるように、満州国の下で1933年に哈爾濱特別市が成立したことを契機に発行された市勢要覧に相当するものである。満州国成立以前のハルビンは、ロシアや中国が支配していたため、日本人が作成したこの種の案内書としては最初のものといえる。市勢要覧とはいえ、200頁を越える大部のもので、ハルビン市の沿革や気象に始まり、行政・警察、財政、教育、通信、交通・運輸、衛生、社会事業、金融、ロシア・中国勢力の消長、輸出入貿易、工業、商工業者の現状に至るまで詳細に解説されており、最後の方には観光案内を意識した見どころや娯楽施設、土産品店などの紹介文が掲載されている。また、折り込みで「哈爾濱特別市区域別図」と題する図が収録されており、市内の行政区画が一覧できるようになっている。

No.13の『最新ハルビン案内』は、奥付では1934年発行、発行所は大北新報社、編纂兼発行人は廣岡光治と記されているものである。廣岡がどのような人物かは詳らかではないが、ロシア語の翻訳書がいくつもあることから¹⁵⁾、ハルビン在住のロシア語に通じた者であったようである。翌年以降の哈爾濱興信所が発行した案内書や地図では、編纂兼発行人となっており、廣岡は翌年から活躍の場を哈爾濱興信所に移したとみることができる。本書は全体で246頁とかなりのボリュームがある冊子である。目次を紹介すると、ハルビンの歴史、ハルビンの外貌、動くハルビン、遊覧のハルビン、享楽のハルビン、学術と芸術、夜のハルビン、ハルビン新風景、ハルビンへーハルビンから、ハルビン邦人発展史、在留邦人に対する事変の影響、印象のハルビン、となっている。章のネーミングには新規性を持たした工夫が施されており、ハルビンの外貌は、ハルビンの位置や内部の各地区、街路、交通機関、建築物、公園など、都市空間の説明であり、動くハルビンは、官公署、銀行、工場、新聞雑誌、市場、商店、病院などの紹介となっている。これらは、従来の案内書にもある地誌的内容であるが、享楽のハルビンや夜のハルビンに示されるように、遊覧者向けの観光案内として記載に富む点に特徴がある。とくに、夜のハルビンでは、花柳界やキャバレー、私娼街について20頁に及ぶ解説がある。付図としては、「哈爾濱市街地図」と題した縮尺2万分の1の詳細な市街図が付けられている。

No.14の『哈爾濱』は、1933年に満鉄が発行したリーフレットである。満鉄発行のリーフレットとしては、No.11に続くものと位置づけられる。ハルビンの案内文は、No.11とほぼ同じ項目で、1933年度用に改訂された内容となっている。ただ、多色刷りであり、裏面に詳細なハルビンの市街地図が描かれるなど、リーフレットの作りは、満鉄発行のNo.8のリーフレットに似たものとなっている。No.8と異なるのは、裏面に市街地図とともに絵葉書にあるような写真が多数配置されていることであり、ハルビンの案内文と地図、写真が一体となったリーフレットとなっている。

No.15の『ハルビン、北満の鉄道沿線 スンガリー沿岸、案内』は、1935年に哈爾濱興信所が発行したもので、編纂兼発行人は廣岡光治となっている。序文には、同書の編纂目的として、同年に東清鉄道が満州国に譲渡されたことにより、日本人の北満に対する興味が刺激され、視察や投資の場を求めて、あるいは歓楽のためハルビンや北満を訪れるものが増加し、また北満で活躍する邦人が急増していることをふまえて、来訪者や在住者に分かりやすく、面白く北満に対する常識を与えること、と記されている。また、「本書は昭和九年版ハルビン案内に北満の鉄道沿線及び松花江沿岸事情並に其後のハルビンの変化を増補したものである。」とあり、No.13の『最新ハルビン案内』の増補改訂版であることが記されている。本書のタイトルの表記が、「ハルビン」と「案内」の間に、「北満の鉄道沿線 スンガリー沿岸」が挿入される形となっているのは、このような編纂事情を反映したものである。内容は、序文の説明通りであるが、鉄道沿線や松花江の解説に加えて、ハルビン北東部で建設が進められていた天理村についての解説もなされている。

No.16の『哈爾濱 X A P Б И Н』は、1935年に満鉄の鉄路総局が発行したリーフレットである。鉄路総局とは、満鉄が1933年に満州国内の鉄道（満鉄以外）の経営を国から委任された際に設立した鉄道の運営機関である¹⁶⁾。満鉄の鉄道運営機関とはいえ、大連にあった満鉄鉄道部とは別組織であり、奉天に置かれていた。同書は、前年に発行されたNo.14のリーフレットと形態も紙面構成もよく似ており、表面にはハルビン案内の解説が、裏面にはハルビンの市街地図と写真が配されている。しかし、案内文の内容自体は似てはいるが、別に記された文章であり、地図もまったく異なるものである。満鉄鉄道部とは別に鉄路総局が独自に発行した案内といえる。

No.17の『X A P Б И Н 1936 ハルビン』は、表紙のメインタイトルはロシア語であるが、日本語の案内書である。奥付によると発行は1936年、発行所は哈爾濱印刷所出版部、編集人は長谷川治となっている。長谷川の素性は不明であるが、住所はホテルの一室となっており、明らかに哈爾濱印刷所とは別の独立した編集者と思われる。総頁数は365頁で案内書としては大部のものである。序文には、従来の案内書とそれに導かれた視察者、旅行者の欠点は「見る可きものを見落とし、見得べきもない既に死滅過去の姿」を追うことと指摘し、本書作成の動機として、ハルビンの認識を正しい方向に引き戻し、伸びるハルビンを新しい角度から見てもらうこととし、具体的には、従来の案内書や視察者によって見落とされていた「哈爾濱の経済的乃至は産業的側面

を一定の角度から観ると云ふことに項目編集の重点」を置いたと述べている。目次を示すと以下の通りである。哈爾濱を観る角度、ハルビンの生い立ち、哈爾濱の栄養素、哈爾濱の心臓、哈爾濱のアウトライン、巡覧のハルビン、夜のハルビン、ハルビンの娯楽、味覚のハルビン、ハルビン異風景、ハルビンの教育と文化、ハルビン邦人の歴史、ハルビン経済界の今日と明日、ハルビンへ来るには、満州旅行者への注意、日満露語会話（ハルビンと哈爾濱の表記の混在は原典のまま）。本書でも、No.13の『最新ハルビン案内』と同様に、章のネーミングに新規性を持たした工夫が施されている。なかでも、哈爾濱の栄養素、哈爾濱の心臓、というネーミングに気を引かれるが、同書によるとハルビンの栄養とは工場生産であり、ハルビン発展の可能性もそこにありとされる。そして、心臓は商工業であり、最初に製造工業、続いて会社商店、百貨店、取引所、金融機関などの説明がなされている。他の章では、ハルビン経済界の今日と明日の章が、商工業の振興との関連で注目される。本書は他の案内書と比べて、内容的には大きな違いはないが、商工業、とくに製造工業の重要性を説き、その内容を目立つようにしている点に特徴があるといえる。

No.18の『哈爾濱』は、1936年に哈爾濱特別市公署が編集・発行したものである。170頁に及ぶものながら、コンパクトなサイズであり、表紙には馬車を引く馬と中央寺院の屋根の尖塔が描かれている。哈爾濱市が市勢要覧と観光案内を兼ねたものとして作成されたものと考えられよう。また、付図としてハルビン市内のバス路線図が付いている。

No.19の『哈爾濱』は、満鉄鉄道総局営業局旅客課が1937年に発行した小冊子である。鉄道総局は、鉄路総局を含め、従来の満鉄の鉄道経営機関をすべて統合して、1936年に奉天に設置されたものである¹⁷⁾。新しい満鉄の組織が作成したハルビンの観光パンフレットと見ることができる。付図としては哈爾濱市街図が付けられており、裏表紙には哈爾濱遊覧案内図と題したイラストが描かれている。

No.20の『ハルビン遊覧案内』は哈爾濱特別市公署交通局が、No.21の『哈爾濱遊覧』は、哈爾濱交通株式会社が発行したリーフレットで、発行年はいずれも記されていないが、記載されている遊覧バスの情報から¹⁸⁾、1935年から1938年の間に作成されたと考えられる。いずれも写真入りでハルビンの概要と見どころが簡単に紹介され、列車やバスの便、旅館などが記されている。

No.22の『哈爾濱ノ観光』は哈爾濱観光協会が1939年5月に発行した小冊子であり、ハルビンの観光地案内の後に接客用の読本が付いている。前書きには、本書はハルビン観光に関わる接客業者のために出版したもので、接客用の読本の部分は、ジャパン・ツーリスト・ビューロー出版の「旅館のサービス」を借用したと書かれている。つまり、本書は観光業者向けに書かれたハルビンの案内書で、その点は他の類書とはまったく性格を異にするものである。ただし、ハルビンの観光地案内の内容は、旅行者向けの内容と変わらないものであり、そのためか、同書は同年9月には、接客用の読本を取り除き、ハルビンの風景や文物の口絵写真を加え、若干文章を修正したものが、哈爾濱観光協会から同じタイトルで発行されている（No.24）。

No.23の『ハルピン観光案内』は、哈爾濱交通株式会社が1939年に発行したリーフレットで、同社の案内としては、No.21に続くものである。同書ではハルピンの概要や名所は非常に短くまとめられており、写真や観光バスコースを記したハルピンの鳥瞰図にスペースが多く割かれている。哈爾濱交通株式会社は、発行年次は書かれていないが、観光バスの運行状況から1939年以降に発行されたと考えられる『はるぴん観光』と題したリーフレット（No.29）を発行している。記載内容や構成は『ハルピン観光案内』と類似しており、この改訂版と思われる。

No.25の『哈爾濱 X A P Б И Н』は、1939年に満鉄の哈爾濱鉄道局が編集・発行したリーフレットで、文章によるハルピンの歴史や名所案内などの解説とともに、風景写真が多く掲載され、ハルピン市街の略図も掲載されている。

No.26の『北滿事情 附哈爾濱観光案内』は、タイトルからは北滿全体の紹介にハルピンの観光案内が付けられたものに思える。しかし、北滿事情の内容はほとんどがハルピンに関するもので、本書全体がハルピンの案内書であるといえる。発行年は1940年、発行所は哈爾濱興信所であり、廣岡光治が編集兼発行人となっている。構成は第一部が北滿事情で254頁、第二部が哈爾濱観光案内で138頁、合計で394頁、第一部の終わりには頁の付与がない写真の部分があり、全体としてかなり分厚い本となっている。北滿事情の序文には、本書は各方面の視察者、旅行者がハルピンへ来て知りたい、聞きたい、調べたいと思うことを、その方面の権威や消息通に依頼して、回答してもらったものとある。例示すると、最初の方の「哈爾濱市の歴史と現状」は哈爾濱市副市長が、「哈爾濱市の財政」は哈爾濱市主計課長、「哈爾濱市の教育」は哈爾濱市視学が解説する形となっている。第二部の哈爾濱観光案内は、ハルピンの歴史から、街区の概要、官公署や銀行、会社、交通、遊覧場所の案内から夜の遊び場まで、従来の観光案内にみられる内容が記されている。

No.27の『北滿の雄都 哈爾濱』は、1940年に哈爾濱市長官房文書課が編集・発行した小冊子である。頁数は付されていないが、全体で20頁の写真を多用したパンフレットで、内容的には市全体を概括的に紹介した、まさに市勢要覧といえるものである。

No.28の『哈爾濱』は、1942年に満鉄の哈爾濱鉄道局が編集・発行した10頁ほどの小冊子である。この種の観光案内としては管見の限り最後のものと思われる。内容的には従来のもので変わりはなく、最後にハルピン市街の略図が掲載されている。

以上、表2に掲載した案内書について解説を行った。全体として、取り上げたハルピンの案内書は、1920年代前半までのものは、内容が詳細で商工案内的性格を持ったものが多いが、その後1926年の満鉄による『ハルピン案内』を嚆矢として、観光案内的性格が強いものが増え、1932年の満州国建国以後1940年頃までは、観光案内を目的とした案内書が多くなるという傾向を指摘できる。ただ、観光案内という場合、観光（当時の表現では遊覧）客は、純然たる観光客だけではなく、視察や商用その他の仕事で訪問し、ついでに遊覧をする人も多かったはずである。その

ため、商工案内か観光案内かという区別は、明らかに観光案内と思えるリーフレットやパンフレット状のものは別として、それ以外の冊子体のもものでは、1930年代のものでも難しいことに留意する必要がある。

4. ハルビンの市街地図

(1) 市街地図の概要と発行の年次的傾向

ここで扱うハルビンの市街地図とは、すでに提示した図2のような、主要な街路とその名称を記し、図によっては官公署、主要な商店などの名称が書き込まれた市街の平面図を指す。形態としては1枚物の図で、案内書や地誌などの付図や挿入図は含めない。そのため、図2をはじめとして、表2で示した案内書の付図はここでは取り上げない。また、都市計画図や市街を斜め上空から見て描いた鳥瞰図やイラストマップも含めない。陸軍が作成した外邦図も対象外とする。このように定義した市街地図について、案内書の場合と同様に、各種図書館、古書店が所蔵するものを可能な限り調査し、入手可能なものは入手した。その結果得た情報をもとに、地図の名称、著者、発行所、印刷所、発行年月等について、発行年月順にまとめたのが表3である。なお、案内書の場合と同様に、同じ物が増刷されて何度も発行されている場合は、原則として初版と改訂版のみ取り上げた。また、所蔵が古書目録となっているものは、目録の情報から存在は確認できたが、現物は確認できなかったものである。

市街地図の発行の年次的傾向を知るため、表1の年表の市街地図の欄に、地図の発行年に印（黒丸）をつけて示した。これに見るように、市街地図の発行は1913年のものが最も早い。その後、やや間をおいて、1920年代には新規発行が数年ごとではあるが継続的に行われるようになる。そして、1932年の満州国成立後は、新規発行が毎年のように行われるようになり、1936年から1939年にかけては、複数の図が新規発行されている。発行の年次的傾向は案内書の場合とほぼ同様で、1910年代はじめに先行して発行されたものがあるものの、その後はやや間が空き、1920年代に発行は継続的に行われるようになる。そして、1932年以降、発行は盛んになるが、1940年代には減少するというものである。この傾向は、案内書の場合と同じく、ハルビンにおける日本人の活動の盛衰と比例しているといえる。

(2) 市街地図の事例

ここでは、表3に示した発行年月の順に沿って、各地図を解説してみたい。

No.1の「哈爾賓市街地図」は、1913年に鈴木北冥堂によって発行された地図で、大きさは、縦横110×79cmに及ぶ、大きな図である。ただし、市街図の四周に主な商店の写真が配置されており、地図が描かれている紙面はそれよりもやや小さい(87×57cm)。描かれている市街図は、図2

表3 ハルビンの市街地図一覧

No.	図の名称	著者	発行所	印刷所	発行年月	縦×横 (c m)	縮尺	備考	所蔵
1	哈爾濱市街地図	鈴木完孝(編纂人)	鈴木北冥堂、安藤商店・大阪屋 號書店(発売所)	十字屋・財藤勝藏<大阪>	1913/11	110×79	—	定価50哥	日文研
2	哈爾濱市街地図：日本人商工案 内	土村良光(編者)	上屋太助(上屋書店)	哈爾濱印刷株式会社	1919/8	80×55	—		日文研
3	最新哈爾濱市街地図	安藤清一(編纂人)	安高洋行	粟本小市<大阪>	1919/11	53×59	—		個人
4	哈爾濱市街全図	—	小北木鉢三(哈爾濱堂書店)	宮口印刷株式会社	1922/?	79×108	—	裏面に商店広告	日大文理
5	濱江街全図	坂井清一(編集兼発行人)	哈爾濱商品陳列館	山田活版所<東京>	1923/3	54×79	1:20000	単色刷	個人
6	哈爾濱市街全図	坂井清一(編集兼発行人)	哈爾濱商品陳列館	滿洲日日新聞社<大連>	1926/8	55×74	1:20000	改訂第2版	愛知大
7	哈爾濱市街全図、埠頭区拡大図	不明	京城美業交通社	不明	1926/?	57×79	不明		古書目録
8	哈爾濱市街全図、附哈爾濱案内	—	岩間商會宝石部	—	(1929/3)	55×39	—	リーフレット	日文研
9	哈爾濱市街全図	寶珠山彌高(編集兼発行人)	哈爾濱商品陳列館	—	1929/8	55×74	1:20000	改訂第4版	日文研
10	大哈爾濱圖 ВЕЛИКОГО Х АРБИНА ПЛАН ГОРОДА	不明	大哈爾濱案内社	不明	1933/?	89×67	1:12000		東洋文庫
11	哈爾濱特別市全図：附哈爾濱特 別市勢要覽	哈爾濱特別市公署總務處調査股編	哈爾濱特別市公署	川口印刷所新京工廠	(1934)	110×79	—	裏面に市勢要覽	国会図
12	哈爾濱市街地図	—	哈爾濱市立工業養成所製	—	(1935頃)	64×51	1:20000	定価国幣三角	岐阜県図
13	哈爾濱特別市全図	—	哈爾濱興信所	—	1936/5	85×59	—		日文研
14	最新哈爾濱案内地図	古賀秀四郎(編纂人)	商工社	—	(1936/10)	40×67	—		日文研
15	哈爾濱案内図	—	哈爾濱觀光協會(蔵版)	近澤洋行	1937/8	38×27	—	裏面に案内文	国会図
16	哈爾濱市全図	—	哈爾濱市公署作製	近澤洋行印刷部	1938/1	109×76	1:16000		謙光社復刻版
17	哈爾濱市全図	廣岡光治(著作兼発行人)	哈爾濱興信所	近澤洋行印刷部(澤田佐 市)	1939/5	78×54	—		岐阜県図
18	哈爾濱案内図	—	日信洋行(藤井金十郎)	青雲堂印刷所(藝西虎次 郎)<東京>	1939/8	53×39	—		個人
19	哈爾濱最新地図 Plan of Harbin	—	A.M. Urbanovitch (Published)	—	1939/?	80×55	—	裏面に商店広告	日文研
20	最新詳密 哈爾濱市街全図	木崎純一	伊林書店	不明	1939/?	79×53	1:20000		古書目録
21	哈爾濱市街図	廣岡光治(著作兼発行人)	哈爾濱興信所	井口印刷合名会社(井口 成士)<東京>	1941/1	76×53	1:16000		岐阜県図
22	最新詳密 哈爾濱市街図	—	日信洋行(藤井金十郎)	日本名所図説社(小山吉 三)<東京>	1943/5	54×38	1:20000	治安部検閲済	日文研

(注) No8、No14の発行年月は掲載されている時刻表から推定。No11の発行年は掲載されている統計から推定。No12の発行年は類似した附図がある案内書の発行年から推定。発行年月の?は記載がなく不明。著者・印刷所の一は該当の記載なし。不明は未確認。縮尺の一は該当の記載なし。所蔵の個人は筆者、古書目録はかつて古書目録に記載があったもの。印刷所の< >は所在地。

(1917年)とよく似ており、両者は共通した地図を基に作成されたか、発行の順からは、図2はこの図を基に作成されたと考えられる。地図としては商工案内の性格が強い図で、旅行者や在住者の商用の便を考えて作られたものであろう。発売所としては、ハルビンの安藤商店のほかに、大連の大坂屋號書店が記されており、印刷者は大阪の十字屋・財藤勝藏となっている。財藤は当時、朝鮮半島や台湾、中国の地図作成を多く手掛けており、1906年から1913年の間に大連の市街地図をいくつか発行している¹⁹⁾。この図は、先行して発行された大連の市街地図の影響を受けて作成されたものと考えられる。なお、地図の定価は50哥(カペイカ)とロシア通貨で表示されている。

No.2は、表題として「哈爾賓市街地図」と「日本人商工案内」が併記された図で、1919年に上屋書店(在ハルビン)によって発行されたものである。市街図の部分はNo.1と比べて、埠頭区、新市街、傅家甸が、やや拡大して描かれている。その中に日本人商工業者はその位置が赤丸で、名称は赤字で強調して書かれており、日本人商工業者が多い埠頭区のカモスタワヤ街附近は、拡大図が挿入されており、旧ハルビンを含めたハルビン市街全体(ほぼ図2に示される範囲)を簡略に描いた図も挿入されている。紙面の下部には日本人商工業者について、名称、業種、所在地の一覧が付いており、地図と対照できるようになっている。これは表題にもあるように、明らかに商工案内図として作成された図といえる。

No.3の「最新哈爾賓市街地図」は、ハルビンの上屋洋行が1919年に発行したものである(図3)。No.2の発行が同年8月であるのに対して、その3か月後の11月に発行されている。描かれる範囲は、No.2と同様で、埠頭区、新市街、ならびに傅家甸であるが、図の南東、範囲外にある旧ハルビンについては挿図で記されている。No.2のように日本人商工業者が記されることはなく、一般図としての性格を持つ図とみることができる。

No.4の「哈爾賓市街全図」は、哈爾賓堂書店によって1922年に発行されたものである²⁰⁾。市街地全体が描かれた図であるが、埠頭区の日本人密集地区については拡大図が掲載されている。市街図の左右と下部には、商工業一覧と題して、日本人商工業者の店名、業種、住所などが記されており、図の裏面には主な商工業者の写真入りの広告が掲載されている。地図の形式から明らかに商工案内図とみることができる。

No.5の「濱江街市全図」は、1923年に哈爾賓商品陳列館によって発行された図で(図4)、編集兼発行人の坂井清一は同館の代表者である。この図は、名称は異なるが、その後に同館が発行する「哈爾賓市街全図」(No.6、No.9)の初版と考えられる図で、No.6、No.9は、この図を基に加筆修正が行われた図となっている。濱江とは傅家甸を中心とした地区のことで、図の名称が濱江街市となっているのは、当時のハルビンでは中国の影響力が強くなっていたためと考えられる。ただ、同時代の他の日本人作成の地図や案内書には濱江という名称は使われておらず、この図のみにその名称が使われている理由は詳らかではない。この図の特徴は、新市街、埠頭区、傅家甸といった既成市街地だけでなく、計画されていた市街(図中では点線で表記)も記されていること



図3 「最新哈爾濱市街地圖」

1919年8月発行 多色刷 53×59cm 図面の影は折り畳み面が色移りしたもの。筆者所蔵

で、それはNo.4までの日本人作成の地図にはみられない点である。ハルビンの都市計画はロシアが行ったものであるため、この図はロシア人作成の図を基に作成されたものと考えられる²¹⁾。図には2万分の1との縮尺が示されており、ハルビンの市街地図で縮尺が示されるのはこの図が最初である。図には主な施設の位置が1～18の番号で記され、左下にはその名称が書かれている。それらを示すと次の通りである。1. 日本領事館、2. 日本居留民会、3. 哈爾濱日本商工会議所、4. 哈爾濱商品陳列館、5. 横浜正金銀行、6. 朝鮮銀行、7. 東拓支店、8. 龍口銀行、9. 松浦商会、10. 東支鉄道庁、11. チューリン、12. 満鉄公所、13. ボロゲン酒粕工場、14. 哈爾濱皮革会社工場、15. 大羅新、16. 満鉄営業所、17. 日露協会学校、18. 志士の墓、である。例示されている商工業者は非常に少なく、一般図としての性格を持つ図といえよう。

No.6の「哈爾濱市街全図」は同じく哈爾濱商品陳列館によって発行された図で、1923年3月初版、1926年8月改訂第2版発行と記されており、初版は上記の「濱江街市全図」を指すと考えられる。初版と同様に、主な施設の位置が番号（赤字で表記）で記されているが、その数は35と倍

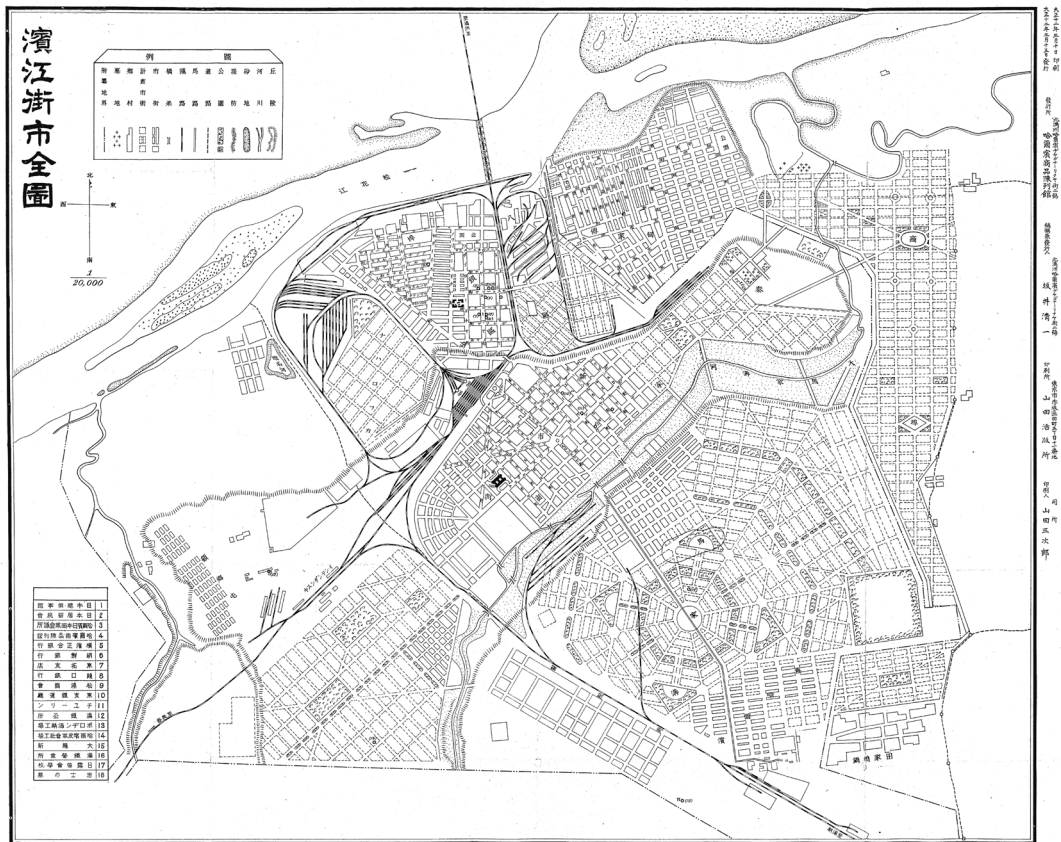


図4 「濱江市全図」

1923年3月発行 単色刷 54×79cm 原図の周囲の余白はカットした。筆者所蔵

増している。増えているのはホテルや寺院、学校などであり、商工業者の記述は多くはない。裏面には、「尊敬すべき各位に対する 哈爾濱土産」と題したハルビンの紹介文が、商品陳列館の館長によって記されている。その内容は、ハルビン、北満州、極東ロシア、シベリアの概要や列国のハルビンへの進出状況を統計で示し、重要な視察場所、土産品、日本人の発展策を記した最後に、商品陳列館の紹介と宣伝が書かれている。つまり、ハルビンへ視察や商用で訪れた旅行者に向けて編纂された案内文が付いた地図といえる。なお、先の案内書で検討した商品陳列館が発行した『哈爾濱案内』（表2のNo.6）には、哈爾濱市街の図が付いているが、その図はこの「哈爾濱市街全図」から、新市街、埠頭区、傅家甸の部分を取り出したとみなすことができる図となっている。

No.7の「哈爾濱市街全図、埠頭区拡大図」は、1926年に京城実業交通社によって発行された図であり、紙面の右半分が哈爾濱市街図、左半分が埠頭区を拡大した図となっている²²⁾。図の四周には写真入りの商家案内が配置され、裏面は営業索引が記されており、商工案内図とみることが

できる。

No.8の「哈爾賓市街全図：附哈爾賓案内」は、岩間商会宝石部が発行した図で、発行年次は記されていないが、1929年3月の東支鉄道の時刻表が掲載されていることから、その頃に作成されたと考えられる。リーフレット状のもので、タイトルが「哈爾賓案内」であれば、案内書として扱うべき内容と形態をもっている。つまり、哈爾賓案内と題したハルビンの案内文が表に書かれ、裏面が市街地図という構成になっている。とはいえ、リーフレットの案内書の地図は挿図という感が強いが、この地図は裏一面に描かれ、その内容も詳細である。地図はNo.6と類似しているが、そのなかで日本人が集住するモストガヤ街にある岩間商会が強調して示されている。この資料は、岩間商会が宣伝用に作成した哈爾賓市街を描いた1枚物の市街地図とも、市街地図を重視したリーフレットの案内書ともみることができる。宝石商の岩間商会は1928年頃に哈爾賓の案内書（表2のNo.9）も発行しているように、この頃、自ら案内書や市街地図を発行し、積極的に宣伝活動を行っていたことがわかる。

No.9の「哈爾賓市街全図」は、哈爾濱商品陳列館によって1929年に発行された図で、No.6の改訂版である。編集兼発行人の寶珠山彌高は、東亜同文書院を卒業し、満鉄勤務などを経て、1922年には商品陳列館の編集部主任となっており²³⁾、図の作成を指揮した人物と考えられる。図の内容はNo.6と同様であるが、図中に赤字の番号で示される主要な施設は47箇所を増えている。増えたのは、中国人関係の官公署、銀行や会社であり、ハルビンで中国の影響が強くなっていたことがうかがえる。裏面には、写真を交えて、商品陳列館やハルビンの簡単な紹介と主な日本人商店の紹介（広告）が書かれている。

No.10は「大哈爾濱図」と題された図で、漢字の表題の下に「ВЕЛИКОГО ХАРБИНА ПЛАН ГОРОДА（大ハルビン都市計画）」とロシア語で書かれている。表題下には「昭和八年、大同二年」ならびに「ИЗДАНИЕ 1933 г.」とあり、1933年に発行された図といえる。地図中ならびに凡例等も全体に渡って漢字とロシア語が併記して書かれており、凡例には「哈爾濱日本帝国総領事館許可 大哈爾濱案内社絵製出版」と記され、下部にはそれに相当するロシア語が書かれている。大哈爾濱案内社とはどのような会社かは不明であり、この図はロシア人が作製したものを漢訳した図である可能性も考えられる。図自体は、同年のハルビン特別市成立を記念して発行されたと思われる図で、旧ハルビンを含めたハルビン市街全体が描かれ、市内の各地区が色分けして示されている。縮尺は1cm = 120mと表示されており、1万2千分の1のかなり縮尺の大きな図である。

No.11の「哈爾濱特別市全図」は、哈爾濱特別市公署が発行したもので、発行年月の記載はないが、裏面に記載されている哈爾濱特別市勢要覽の統計の年次が1934年であることから、1934年に発行されたものと考えられる。市街図はハルビン全体を描き、上部には満州国全体と行政体としてのハルビン特別市全体を描いた挿図がある。裏面は市勢要覽であるが、文章の四周にはハル

ピンを紹介した写真が配置されている。このように、これは地図の形態をとった市勢要覧の一種であるとみることができる。

No.12の「哈爾濱市街地図」は、哈爾濱市立工芸養成所製と書かれている図である。発行年は書かれていないが、表2のNo.15の案内書にある付図と非常によく似ており、案内書が発行された1935年頃に発行されたものと思われる。旧ハルビンを含めたハルビン市街全体を描いた図であり、他の図でもみられるように図中に赤字の番号で主要な施設を記してある。その数は、新市街55、埠頭区74、傅家甸42、合計で171に及んでおり、非常に多い（No.15の案内書にある付図では60である）。そのため、同図はこの時期のハルビン市街の施設を図示した地図としては、もっとも詳細な図といえることができる。

No.13の「哈爾濱特別市全図」は、哈爾濱興信所が1936年に発行した図である。ハルビン市街全体が描かれており、図中に赤丸で官公署著名商店会社（凡例にある表現）の位置が記され、赤字の番号が振られている。番号が振られている官公署著名商店会社は新市街で21、埠頭区で22、傅家甸20、合計63である。そして、乗合自動車の路線が赤字で引かれており、この図ではひときわ目立つ表現となっている。なお、No.17の1939年に哈爾濱興信所が発行した「哈爾濱市全図」は、図の名称が異なるため表3では別の図として扱ったが、内容はほとんど同じで、No.13の改定版といえる図である。

No.14の「最新哈爾濱案内地図」は、商工社が発行した地図で、表3のなかで案内と銘打った図はこれが最初のものである。発行年月の記載はないが、掲載されているハルビン駅発着の時刻表には1936年10月1日改正とあり、その頃に発行されたと考えられる。横長の紙面に新市街、埠頭区、傅家甸が描かれ、旧ハルビンは挿図で表現されている。図中の線はガタガタしており、文字も手書きを思わせるもので（挿図の「遊覧バス往復コース」は明らかに手書き）、全体として近世の木版印刷による図に似た印象がある。これも主な施設には図中に赤字で番号が振られ、その名称が記号説明に記されている。その数は、新市街は26、埠頭区は22、傅家甸は26である。また、図中には電車線路が赤字で引かれ、乗合バスの線路が点線で引かれている。全体として観光案内図としての性格が強い図といえる。

No.15の「哈爾濱案内図」は、1937年に哈爾濱観光協会が発行した図である。これも案内図と称され、それまでの街路を細かく表現した市街図とは異なって、バス路線と停留所を赤字で強調した市内交通案内の性格が強い図となっている。主要な施設は「著名地」として、図中に赤丸で示され、丸のなかに名称が記されている。裏面にはハルビンの案内文が、観光地、土産物、乗物案内、娯楽場などの項目で書かれており、哈爾濱八景や近郊四勝という名称で見どころの案内も記されている。全体として、地図の形態をとったハルビン案内とみることができる。

No.16の「哈爾濱市全図」は、1938年に哈爾濱市公署が作製し、近澤洋行印刷部が印刷した図である。市街地を描いた図であるが、縮尺が1万6千分の1と比較的大きいため、縦109cm、横

76cmの大きな図幅となっている。この図は1970年代から1980年代かけて復刻版が刊行され、今日では比較的良好に知られているものである²⁴⁾。凡例で、「官公署並二著名建築物」は丸印で示されることになっているが、図中に示されるのは新市街の鉄道局と濱江署、埠頭区の市公署くらいで極めて少ない。そのため、主要な街路と街路名などが記された一般的な市街図とみることができ。また、図の左右の上部に挿図として「哈爾濱附近図」と「満洲国区域図」が置かれている。

No.18の「哈爾濱案内図」は、日信洋行の藤井金十郎によって1939年に発行された図である。同図は各種図書館には所蔵されていないが、古書目録では1940年、1942年発行のものも確認できる。藤井は同社の代表と思われ、同時期に同社名でハルビンの写真帖をいくつも発行している。この地図では、旧ハルビンを含めたハルビン市街全体が描かれるが、赤い太字で行政区境が強調して示され、赤字の点線で分区境が示されている。主な商店やホテルなどは、丸印のなかに名称が書き込まれて示されているが、目立つ表記ではない。案内図と題されているが、観光案内図というよりも一般図という印象が強い図である。

No.19は、「哈爾濱最新地図 Plan of Harbin」と題された図で、題名の下には「1939 Published by A.M. Urbanovitch」と記されている。地図面には市街図の周囲に商店の広告が表示され、凡例は日本語と英語が併記されている。市街図は、街路名や地名は英語（所々に漢字）で表記されており、地図そのものは英語で作成されたものを、日本人が加工し発行したものと見える。裏面には日本と外国の商店の広告が日本語と英語を併記して記されている。また、図を地図面を内側にして折り畳んだ際に表紙に来る部分には、地図面と同じ表題とともに、松浦洋行とモデルンホテルの広告が記されている。いずれもハルビンを代表する商社とホテルであり、この図はこれらの有力な商店が中心となって、日本人ならびに外国人双方の旅行者向けに作成された商工・観光案内用の地図とみることができ。

No.20の「最新詳密 哈爾濱市街全図」は、伊林書店が発行し、木崎純一が著作もしくは製図を担当して、1939年に発行した図である。1938年から1943年にかけて木崎と同書店は、中国と朝鮮の地図を数多く作成しており、大連に関しては1938年に、「最新詳密 大連市全図」と題する市街地図を発行している²⁵⁾。ハルビンのこの図は、その一環として作成されたものと位置付けられる。図ではハルビンの市街全体が描かれ、市街地部分は着色して表現されている。一般図としての役割をもつ図と見ることができ。

No.21の「哈爾濱市街図」は、1941年に廣岡光治が著作兼発行人となり、哈爾濱興信所が発行した図である。著者、発行所が同じことから、No.17の「哈爾濱市全図」の後継の地図といえ、地形や街路の形態等は、まったくNo.17を踏襲した図である。しかし、行政区境が1点鎖線で表示され、区名が大きな赤字で表記される（これらはNo.17にはない）など、新たな情報が盛り込まれている。一方、市内の主な施設に関して、図中に番号を振って凡例でその名称を記すという、市内案内の情報は無くなっている。そのため、案内地図というよりも、一般図としての性格が強い

図となっている。また、挿図として「満洲国区域図」と「日満連絡交通図」が新たに付けられている。なお、この図と同じものは、1944年1月にも発行されており、本研究で対象とするハルビンの市街地図としては、最後に発行されたものと考えられる。

No.22の「最新詳密哈爾濱市街図」は、日信洋行の藤井金十郎によって1943年に発行されたもので、印刷は東京の鳥瞰図発行で知られる日本名所図絵社が行っている。この図も発行者名から、No.18の「哈爾濱案内図」の後継の図と位置づけられ、地形や街路などの図の輪郭は、No.18を踏襲しているが、行政区を色分けして表現するなど、図の印象はかなり異なった図となっている。図中では官公署や主な商店など主要建物が赤丸で示され、名称も書き込まれているが、その数は多くない。市内の電車線路やバス路線は黒の細い線と点線で描かれており、目立たない表現となっている。そのため、この図も一般図としての性格が強いものといえる。なお、図の欄外には治安部検閲済との表記がされており、戦争が激化するなかで地図作製も制限を受けていたことがうかがえる。

以上、表3に掲載した市街地図について解説を行った。全体として、1910年から1920年代の図は、概して商工案内を主目的としたものであったが、1930年代の満州国成立後は、ハルビン市が発行した行政による一般図や、観光案内を主目的とした民間発行の図がみられるようになる。民間発行の観光案内図としては、1936年発行の「最新哈爾濱案内地図」(No.14)と、1937年発行の「哈爾濱案内図」(No.15)が代表的なものといえる。しかし、その後は民間発行の市街地図は、観光案内図ではなく一般図としての性格が強くなる傾向にある。その理由は、1937年に日中戦争、1941年に太平洋戦争が始まり、生活のなかで観光活動が低下したことや、地図は検閲を受けるなど、記載内容に制約が生じたことが背景にあるといえる。

5. おわりに

本研究では、20世紀前半に日本人が作成したハルビンの案内書と市街地図に関して、現時点で可能な限りの情報を収集し、全体像を提示することを目的として研究を進めた。結果として案内書は29点、市街地図は22点見出すことができた。また、各種図書館で所蔵が確認できず、筆者が所蔵するもので、貴重と思われるものに関しては、画像を提示して紹介を行った。従来のハルビンの都市史、日本人史、観光研究において、部分的に利用されてきた案内書と市街地図の全体像を提示し、今後の近代ハルビン研究に資する基礎的情報の提示を行ったことが本研究の第一の意義と考える。そして、3章、4章での検討によって明らかになった両者の内容の特徴を年代ごとに大体的にまとめると次のようである。

まず、1910年代に先行して少数のものが発行され、1920年代には継続的に発行されるようになる。その頃の内容は案内書、市街地図ともに商工案内を主としたものである。それが、1932年の満州国成立以降は、ともに数多くのものが発行されるようになり、内容は観光案内を主としたも

のが増えていく。しかし、1939年を発行のピークとして、その後は減少し、1945年の日本の敗戦へと至る、という傾向である。そして、これらは日本人のハルビンでの活動の変化を表しており、1900年代の日本人居住の始まり、1910年代の在留日本人数の増加と1920年代の持続、1930年代の在留日本人と旅行者の急増を反映したものと見える。概ね予想される結果であるが、1939年が発行のピークとなっているのは、ジャパン・ツーリスト・ビューローが斡旋した満州への旅行客数のピークが1939年であること²⁶⁾と一致しており、この種の資料の検討が社会の動向を知る手がかりとなることをよく示している。

本研究で扱った案内書や地図類は、従来、歴史研究の資料として十分に扱われてきておらず、図書館や研究機関に所蔵されていないものが多数存在する。ハルビンに関しても、今後、個人所蔵のコレクションの公開や、古書市場を通じて明らかになるものも少なくないと思われる。特に1920年代の案内書と市街地図に関しては、本研究で示したもの以外にも、存在することが十分に考えられる。本研究の目的と直結する今後の課題は、それらの資料についてフォローしていくことである。また、市街地図に関しては、日本人が作製した地図の基となったロシア製地図について、どのようなものがあつたのか、精査する必要がある。さらに、発展的な課題は、今回明らかになった案内書、市街地図を活用して、近代ハルビンの商工業や観光の実態を解明することである。これらについては他日を期したい。

注

- 1) たとえば、近代日本の旅行案内書を集成し、解説した、荒山正彦監修・解説『シリーズ 明治・大正の旅行 第I期 旅行案内書集成』ゆまに書房、2014-2015、および、荒山正彦『近代日本の旅行案内書図録』創元社、2018、にも満州の旅行案内書が収録されている。
- 2) 旧満州およびハルビンの日本人史研究のなかで、案内書の一部は活用されているが、総体的な検討は行われていない。塚瀬 進『満洲の日本人』吉川弘文館、2004。上田貴子「哈爾濱の日本人——1945年8月-1946年9月」(山本有造編『「満洲」記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007)、140-179頁。なお、旧満州の都市で、大連に関しては次の文献で案内書の集成が行われているが、商工案内が中心で観光案内の類は、わずかに収録されていない。松重充浩・木之内誠・孫安石監修『近代中国都市案内集成 大連編 全18巻』ゆまに書房、2016。
- 3) 小林 茂編『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域—「外邦図」へのアプローチ』大阪大学出版会、2009、同編『近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図』大阪大学出版会、2017、を参照。
- 4) 中西僚太郎「日本植民地期の大連市街地図について」歴史人類 48、2020、96-110頁。
- 5) 近代日本の都市図、商工地図を活用したり、その性格や発行の経緯を論じた研究としては、次のものがある。岡島 建「近代の商工地図とその利用—神奈川県を例を中心に—」国土館大学文学部人文学会紀要 34、2001、99-115頁。山根 拓「近代地方都市図の展開—富山・金沢の民間地図」(中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界—』ナカニシヤ出版、2008)、19-44頁。河野敬一「大正・昭和前期の職業別明細図—「東京交通社」による全国市街図作成プロジェクト」(中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験—絵地図と古写真の世界—』ナカニシヤ出版、2008)、125-144頁。
- 6) 越沢 明『哈爾濱の都市計画』総和社、1989、金 鐵権『近代ハルビン中心市街地における都市空間の形成

に関する研究』（早稲田大学理工学研究科・博士論文）、2003、など。

- 7) 貴志俊彦『満洲国のビジュアル・メディア：ポスター・絵はがき・切手』吉川弘文館、2010、など。
- 8) 毛利康秀「ツーリズムの視点からみた「メディアとしての絵葉書」の再検討―戦前期ハルビンに関連する絵葉書を事例として―」年次研究報告書（日本大学文理学部情報科学研究所）15、2015、67-73 頁、など。
- 9) この時期の満州・朝鮮方面への日本人旅行者の動向を、多数の旅行記を分析して明らかにした研究として、米家泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究―鮮満旅行記にみるツーリズム空間―」京都大学文学部研究紀要 53、2014、319-364 頁、がある。
- 10) 観光案内としてリーフレットに注目し、それを用いて、日本人の満州旅行を論じた研究として、荒山正彦「リーフレットからみる満洲ツーリズム」（中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験―絵地図と古写真の世界―』ナカニシヤ出版、2008）、163-181 頁、がある。
- 11) 目次には、序文の後に「哈爾賓市街地図」が、「東清鉄道路線図」の図とともに付される形で示されているが、筆者が実見した東京外国大学所蔵本に地図は付されていない。
- 12) 岐阜県図書館には、この図と同じで、タイトルが「最近実測 哈爾賓市街全図」となっている図が所蔵されている（同館のオンラインの蔵書検索には登録されていない）。発行所は哈爾賓モストワヤ街安高洋行と記され、発行年次は記されていないが、『哈爾賓案内』と同時期に発行されたものと考えられる。
- 13) 永森書店の古書目録 40 号に掲載されている『哈爾賓案内』（1933 年）は同書の改訂 11 版と推定されるが、現物は未確認。
- 14) 竹中憲一編著『人名事典「満州」に渡った一万人』皓星社、2012、1551 頁。
- 15) 廣岡光治訳『露西亜刑法』巖松堂書店、1929、など。
- 16) 南満洲鉄道株式会社総裁室弘報課編『南満洲鉄道株式会社三十年略史』南満洲鉄道株式会社、1937、237-241 頁。
- 17) 前掲 16) 242 頁。
- 18) 両書に記されている、1 人当たりの遊覧バス料金は 1 円 50 銭である。表 2 に示した案内書によると、遊覧バスは 1934 年の夏期より始まり、1 人当たり料金は 1 円 50 銭であったが（No.15）、1939 年 6 月には 2 円 50 銭となっている（No.23）。このことから、両書はこの間（年次で区切ると 1935 年から 1938 年の間）に発行されたと考えられる。
- 19) 前掲 4) 108-109 頁。
- 20) 日本大学文理学部資料館編『展示図録 描かれた〈満・蒙〉―「帝国」創造の軌跡―』日本大学文理学部資料館、2012、10 頁、による。現物は未確認。
- 21) この地図とよく似たロシア人作成と思われる 1910 年代の地図は、西澤泰彦『「満洲」都市物語 ハルビン・大連・瀋陽・長春』河出書房新社、1996、26 頁に紹介されている。
- 22) 永森書店の古書目録 35 号による。現物は未確認。
- 23) 前掲 14) 1284 頁。
- 24) 謙光社によって、『満洲地図シリーズ 6』として刊行されている。原図の所在は不明。
- 25) 前掲 4) 98 頁。
- 26) 前掲 10) 168 頁。

付記

本研究を行うに当たって、国際日本文化研究センター図書館、岐阜県図書館の方々には所蔵地図の閲覧において、便宜を図っていただきました。また、筑波大学附属図書館のレファレンス担当者の方々には資料の取り寄せに際して、お手数をおかけしました。皆様にお礼申し上げます。なお、本研究は科学研究費補助金（課題番号 17K03238）による研究成果の一部である。